童話

不思議な鞠

女高師附屬高女　水谷年惠子

百太郎は山の中で路にまよつてしまひました。さあどつちへ行つたらお内へ歸へられるのか、さつぱり分りません。百太郎は困つて泣き出しさうになりました。

「お父さんが來て呉れるといゝなあ、お母さんが來て呉れないかなあ。」と思ひましたが、變な聲で鳥が鳴いたり、がさ〳〵と狐だか何だかが通つたりする外には誰も百太郎を迎へに來て呉れる人はありませんでした。

百太郎はとう〳〵泣き出してしまひました。山の樹が風に吹かれて、さら〳〵〳〵と鳴るとなほ〳〵淋しくなつて、大きな聲で泣きたてました。

あまり泣いて、泣き疲れると、百太郎は其の場でぐう〳〵と寢込んでしまひました。暫くして眼が覺めて見ると、百太郎はびつくりしてしまひました。そして、

「ひやあー、綺麗だなあー」

と大きな聲で叫びました。それも其の筈、百太郎は今ぴか〳〵光る御殿の中に居るのです。そればかりか、百太郎のすぐ側には、それは〳〵美しい山の女神樣がいらつしやるのですもの。

「百太郎さん、眼が覺めましたか。」

と山の女神樣がおつしやつた時には、百太郎は山の女神樣をじいつと見つめただけで、何もものが言へませんでした。

御殿のお庭には、色々の花が一面に咲いてをりました。お庭のむかうの方には、珍しい寶物で一ぱいになつてゐるお倉が、幾つも幾つも並んでゐました。何を見ても美しいもの、不思議なものばかりで、百太郎は眼が見えなくなつてしまひさうでした。

山の女神樣は百太郎に、

「百太郎さん、何でもあなたの欲しい物を上げませう。何が欲しいか言つて御覽ん。」

とおつしやいました。百太郎は何を戴かうかと方々見廻しました。

お庭の花は、白も赤も紫も皆きら〳〵と輝いて何年たつても散らない花でした。お倉の中の寶物には、眞珠やダイヤモンドで飾つた靴や、かぶると暗がりでも眼の見える帽子もあります。もの言ふ人形もあるし、駈廻る木馬もありました。

山の女神樣は、

「ねえ百太郎さん、あなたの欲しい物は何でもいいから持てるだけ持つていらつしやい。」

とおつしやいました。百太郎は暫しの間考へて居りましたが、

「お姫樣、欲しい物が一つあります。」

と言ひました。

「何が欲しいの、さあ言つて御覽なさい。」

「私はゴム鞠が一つ欲しう御座います。」

「え、ゴム鞠が一つ。たつたそれだけでいゝの。」

「はい。私はゴム鞠が一番欲しう御座います。」

山の女神樣はおつきの者にお言附けになつて、方々おさがさせになりました。やがて一人のおつきの者が、古いゴム鞠を一つ、何處からか見附けて持つて來ました。山の女神樣はそれをお取りになつて、

「百太郎さん、これでいゝの。」

とおつしやつて、百太郎にお渡しになりました。

百太郎は其のゴム鞠をおし戴いて、大事さうに懐へ入れました。ゴム鞠を懐へ入れる拍子にパッと御殿が消えて無くなつてしまひました。其處にはもう山の女神樣もいらつしやいませんでした。お庭の花も、寶物のお倉も、何も彼も無くなつて其處は草や樹の一面に生えたお山の中でした。百太郎が路にまよつて、泣き出して眠つてしまつた其のお山の中でした。

百太郎は美しい御殿や、山の女神樣の事を考へて、あれは夢だつたか知らと思ひました。そして懐の中へ手を入れて見ました。すると古いゴム鞠がちやんとはいつて居ました。

「おや〳〵、ゴム鞠はちやんとある。」

と言つて、ゴム鞠を出して眺めて居ました。すると、ゴム鞠がぽんと手から飛下りて、ころ〳〵ころところがり出しました。百太郎は大事のゴム鞠をなくしては大變だと思つて、其のゴム鞠を追駈けて行きました。

ゴム鞠はどん〳〵〳〵ころがつて行きます。百太郎が追駈ければ追駈ける程、ゴム鞠は勢よくころがつて、何處まで行つても止まりません。百太郎は汗を流して、一生懸命て追駈けました。其の中にゴム鞠はよそのお内の中へ飛込んでしまひました。百太郎も續いて其のお内の中へ飛込んでしまひました。すると、

「おや百太郎ぢやないの。」

と言つた人がありました。見ると、それは百太郎のお母さんでした。其のお内は百太郎のお内でありましたとさ。